

# みんなのひろば



▲野老澤町造商店を中心にひな人形の展示や手作り教室などが行われた『野老澤雑物語』。第2市民ギャラリーでは「創作人形・細工物とつりびな展」が行われ、伝統的なひな壇や華やかな人形たちが会場を彩りました。

2月28日(休)／第2市民ギャラリー  
(撮影：市民カメラマン・伊藤磨紀子)



▲ママたちの「もっと積極的に子育てに関わって」という要望に応えて開講した『パパスクール』。最終回は簡単パパごはん挑戦。ママと子どもをランチに招くため、炊き込みご飯・煮物・豆乳寒天を一食懸命作りました。

3月9日(出)／新所沢まちづくりセンター  
(撮影：市民カメラマン・木村清貴)



▲「つながる心が世界を結ぶ」をテーマに今年で18回目を迎えた『所沢市国際交流フォーラム』。着物やチャコゴリなど民族衣装で華やかに盛り上がりしました。

3月10日(日)／市役所1階市民ホール  
(撮影：市民カメラマン・佐藤清一郎)



▶市内に本拠地があるバレエ団の協力のもと行われた「市民教養セミナーバレエ入門講座」。バレエの歴史や衣装について学び、ストレッチの体験をした後、教室内で披露されたパフォーマンスに思わずうっとり。  
3月14日(休)／生涯学習推進センター1  
(撮影：市民カメラマン・津田資雄)

## おうちで食べよう! 所沢の学校給食 634のマリネ

全国学校給食甲子園入賞献立

栄養士さんが考えた学校給食のメニューの中から、所沢産の食材を取り入れたものや、特色あるレシピを紹介します。

◆今回の献立  
開拓丼  
ふわふわ野老汁  
634のマリネ★  
牛乳  
みかん



### ★634のマリネ

材料(4人分)

- ・かぶ……………中4個
- ・ほうれん草 ……1/4束
- ・梨……………1/4個

- ・オリーブオイル……小さじ1
- ・りんご酢……………小さじ1
- ・さとう……………少々
- ・塩……………小さじ1/4
- ・こしょう……………少々

### 作り方

- ①かぶは、縦半分に切り薄切りにする。ほうれん草は3cmぐらいに切る。
  - ②かぶ・ほうれん草をゆでて冷ます。
  - ③梨はすりおろす。
  - ④梨と①の調味料でドレッシングを作り、②の野菜とあえて出上がり。
- ◎梨をりんごに代えてドレッシングを作ってもおいしいです。

ここがポイント

### 全国学校給食甲子園入賞!

今回は、全国学校給食甲子園入賞レシピ第3弾です。武蔵野台地で栽培が盛んに行なわれている「かぶ」「ほうれん草」「梨」を使ったあえ物です。

日本一の東京スカイツリーの高さにあやかり634のマリネと名付けました。

問い合わせ 保健給食課 ☎2998-9249 ☎2998-9167

## はつらつ 野老っ子



2年前の3月11日、忘れられない、忘れてはいけない「あの日」、福島第一原発から5kmしか離れていない福島県双葉郡富岡町で東日本大震災に遭遇し、避難を余儀なくされ、所沢で再出発を果たしたイチゴ栽培農家の中島正弘さんをご紹介します。

配達先に向かう途中に大きな揺れを感じた中島さんは、震災発生から6日後に友人の車と電車を乗り継いで親戚がいる埼玉へ辿り着きました。仕事を探すため訪れたハローワークで、市内の受け入れ農家などで研修を積み「就農希望者育て上げ事業」を知り「農家の私にぴったり」とすぐに申し込みます。それから約1年間、和ヶ原の農家で里芋やほうれん草などの栽培方法を学びました。「野菜を本格的に作ったのは初めてで、最初は戸惑いました」と語る中島さんは、イチゴ栽培が専門。研修と同時にイチゴ栽培に適した農地を1年間かけて探し、やっと巡り合った所沢の農地で今年、初収穫がなりました。中島さんが育てたイチゴは大粒で鮮やかな赤が目立ちます。販売時には、おいしいイチゴが醸し出す甘い匂いに誘われて、多くのお客さんが集まります。そして、その味は福島にも届けられました。「震災のとき、心配して一番に連絡をくれたお客さんにイチゴを送ると『もったいなくて食べられ

## 3月11日からの再出発～イチゴに希望を込めて～

中島 正弘さん(中富南在住)

ないわ…」と言いながら、とっついても喜んでくれました」と笑顔がこぼれます。

震災以降、福島の自宅には7回しか帰っていません。おいしい作物を作るために何十年もかけて耕してきた土も、もう戻ってきません。「土地や家はどんどん荒れていき、むなしさが募ります。福島でも所沢でも、安心・安全はもちろん、喜んでもらえるおいしい作物を生産することが農家としての私のプライド。いつかはまた自分の農地を持って、土づくりからイチゴを育てたい」とふるさとへの思いを胸に、前へ進みます。「もう農業はできないだろうと思っていましたが、まさにイチゴが繋いだ『一期一会』。所沢で出会った多くの方々のおかげで、目標への最初の一步が踏み出せました」と語る横顔からは安堵の表情が垣間見えました。

中島さんの思いがこもったイチゴ一粒一粒が、震災からの復興の希望の光となることを願わずにはられません。



▲市内で初収穫したイチゴと中島さん

## ところざわ 歴史まめ知識

所沢市域に関わる歴史的事項を50音順で紹介していきます。今号は「む」です。

### む

**武蔵野話** 「むさしのぼなし」「ぶぞうやわ」とも読みます。江戸の文人、斎藤鶴磯が文化12年(1815)に出版した地誌で、幕府が編さんさせた「新編武蔵風土記稿」とともに、江戸時代の近郷の様子を知る貴重な資料です。鶴磯は所沢に約20年間暮らし、各地を訪ね歩いて社寺や旧跡、文書や石造物などを調べ、丹念に記録にとどめました。また書にも優れ、坂稻荷の職などを残しています。しかし、本に掲載した内容がもとで地元の人々と摩擦が生じ、後に所沢を離れることになりました。鶴磯の没年は文政11年(1828)、墓は巢鴨の慈眼寺にあります。

▲斎藤鶴磯の墓

**向山小平次** 向山家は所沢の大商家で、屋号は「油屋」、その当主は代々「小平次」の名を継いでいます。江戸時代に織物の仲間などで成長し、やがて所沢屈指の豪商として明治期には町勢振興にも力を尽くしました。金融の要として銀行を創業したり、所沢織物の品質向上のため組合を設立したり、また飛行場の設置にあたっては私費を投じて誘致を進めています。しかし、大正3年(1914)、日露戦後の慢性的な不況と主力の織物産業の斜陽化から、向山家は早々に店をたたんで所沢を去ります。宮本町の旧市庁舎の場所は、かつてそれと知られた向山家の豪壮な別邸があったところです。

**六つ家川** 狭山丘陵の北麓に発して東へ流れ、丘陵をぐるりと南東に遠回りして下山口駅の東で柳瀬川に合流する小さな川です。かつて水田が広がっていた流域一帯は、昭和40年代から開発が進み、住宅地になりました。家々の間には今でも多くの細い支流が残っていて、丹念に歩くとかつての自然がしのばれる、興味深いものです。地元の人々がお金を出し合って川に石の橋を架けた、そんな事情を伝える石橋供養塔が多いのも特徴です。

問い合わせ 生涯学習推進センターふるさと研究 ☎2991-0308 ☎2991-0309

## 誰でもエッセイ

### ◆テーマ「桜」◆

### 思い出の桜

私ふるさと京都には数々の桜の名所がある。ふるさとを離れ、所沢の住民になったのは、40年あまり前のこと。現在の所沢駅東口付近にあった桜の古木や、長者久保公園内の桜、東川の桜並木などふるさとを思い出させてくれる桜が私を迎えてくれた。桜の季節になると、現役時代は散歩やジョギングをしたり、また定年後のヘルパー時代には通院の行き帰りに会話にも花が咲いたことが思い出される。障がい者となった今は、デイサービスの中から毎年桜を眺められることに感謝している。

### ◆春の花「桜」◆

春を代表する花「桜」。寒くて長い冬を耐え抜いて、淡いピンクの蕾が少しづつ、ほころびてくると、心地よい春の訪れを感じる。

### 小さな神様

私は子どもの通っていた小学校の「桜」が一番好きです。入学式の日、満開の桜の下で記念写真を撮った子どもたちも、ひとつずつ学年を重ね、卒業の日には、まだ蕾の桜に見送られ果立っていくのです。ずいぶん前からそこにあり、たくさんの子どもの成長を見守り、大人になっても毎年美しい花を咲かせ続ける校庭の桜。満開の桜を見上げるとき、子どもたちの笑い声が聞こえたような気がしました。桜の木には小さな神様が宿っているのかもしれない。

